

カール・S・グートケ著

デスマスクの石膏模型

——ゲーテと最期のことばの崇拜——

信 岡 資 生 訳

1

ところで最期のことばのこのような重大視、このような尊重の理由は何だろうか？ なぜ最期のことばに人々は関心を寄せるのであろうか？

一つの理由は、死にゆく者は世人の記憶に残るような最期のことばによって一種の世俗的不死の身分になれるということである。何世紀もの間を通じて、死が最期のことばの中で生きながらえるのは、例外どころかむしろ通例ではなかったか。もはや消すことのできない署名の中で生きながらえるものとなる——だから自己の死の演出がしばしば行なわれたのである。なぜなら、デスマスクが真の顔をとどめるように、最後の発言は黄金のことばとして世代から世代へ語り継がれて永久遺産となり、それ自体貴重なものとなる。それは人工物の中での有機物の止揚、超時間性の中での時間の止揚、永遠の中での無常の止揚である。この自己超越の衝動、「おれの地上の生涯の痕跡が永劫に消えることのない」¹のを確かめたいファウストの欲求は、人間を他の脊椎動物と区別する涙ぐましい特性である。この特性は間違いなく普遍的である。古代エジプトのファラオ、アスカ帝国の吟唱詩人、アイスランドのサガの英雄主人公、ハドリアヌス帝² からフランコ³ にいたる壮大な霊廟建設者たち、それに三島由紀夫も含めてみんな

この性向を共有している。なかでも三島は、1970年11月25日、入念に計画し演出した切腹の当日の早朝、誉れの時の市ヶ谷自衛隊突入を前にして、書斎の机の上に「人生は短かし、されどわれは永遠に生きたし」とのメモを残していた¹⁾。「おお主よ、何かをとどめさせ給え」（イエーツ『ヴィジョン』⁴⁾）。したがって死にゆく者が自己の人生体験を最期のことばに要約しようと努めるとすれば、この体験を伝えて後世の共同社会の集団意識に何らかの貢献をしたいと期待するのは当然の望みなのである。

ゲーテ自身このことについては特に発言しなかった。しかし彼の最期のことば（と言われているもの）にまつわる後日譚は、彼がその（どちらかと言えば偶然の、しかしそれにもかかわらず重大視される）最期のことばによって不死を手に入れた、——多くの人びとがゲーテ以上に懸命になって巧妙に仕組み十分練習を積んだことばを使って死を自己演出して得ようと努力するにもかかわらず到達できないでいる不死に、ゲーテは成功したことを実に見事に立証している。

われわれの文化において準制度化された最期のことばの特別視のもう一つの理由は、生の本質ないし真実——「真の」自己は、死において、死においてのみ現われ、最期のことばで自己を表現するという依然としてなお根強い期待である。それは、生は仕上げをすることになっていて、生の型は首尾一貫して完結し、そうすることでこの生の本来のアイデンティティをその実体として明かす、「死において強まる主情」（A・ポープ『コベム卿への書簡』⁵⁾）の思想である。これは伝記のお定まりのパターンとしてお馴染みのものである。生きてきたままに死ぬ——聖人であれ罪人であれ、

1) Robert Jay Lifton: *The Broken Connection. On Death and the Continuity of Life*. New York 1979. S. 277; vgl. Marguérite Yourcenar: *Mishima. A Vision of the Void*. Henley-on-Thames 1986. S. 143. 三島の最後の演説と彼の死の状況については次の書を参照: John Nathan: *Mishima. A Biography*. Boston 1974. S. 278–281. また言及した古代北欧伝説の登場人物については次の論文を参照: Lars Lönnroth: *Hjalmar's Death-Song and the Delivery of Eddic Poetry*. in: *Speculum* 46. 1971. S. 1–20.

才智に溢れてにしろ、退屈きわまりなくにしろ、死による生の確認。あるいはまた一見これと対立する考え方、すなわち予期しない首尾一貫、これは臨終の床でのラディカルな転回に現われる。改宗、撤回、悟り（エドワード・ヤング⁶の「人は愚かに生きても、愚かに死ぬことはできない」。「おれは馬鹿だったが、今は正気に戻った」と言って死んだドン・キホーテの模範例²⁾）。いずれにせよ、確認であれ回心であれ——生は適切な結びのことばで完成される。そこでその完成が問題となる。完成された芸術品、特にドラマとしての生。ここで演劇の比喩が一般に行なわれるわけである。最期のことば自体もだ。幕際の台詞は重要である——それまでの台詞全部にまして重要であることも少なくない。そのことを例えば『死アルティス・モリエンディの作法』は15世紀から18世紀に入ってまで、つまり死がなお多かれ少なかれ公開の見世物であった時代に教えてきたのであった。しかしオクタヴィオ・パス⁷も有名な『諸聖人、死者の日』についてのエッセーの中でこの考え方がまだ生きていることを立証する。同様にホルスト・リュウディガーも1971年に、そして1983年にも繰り返して「最期のことばからは生存のレジユメのようなものが期待される」と言っている³⁾。

私がここで「最期のことば」という一連の問題の結晶像として取り上げるゲーテは、この問題にはむしろ懐疑的であるように思われる。確かに彼は『詩と真実』の序言で、「[個人が] どのような境遇にあってもどの程度同一者として変わらなかったか」を描くことを伝記の任務としているし、またトーマス・マンは1932年『作家としてのゲーテの経歴』についての講演の冒頭で、ゲーテがいよいよの最後に、もうものが言えなくなった状態で、消えんとする力でなお空中に文字を書いた——つまりゲーテは生き

2) Edward Young: *Night Thoughts* IV, V. 842; Don Quixote, 終章。

3) Paz: *Das Labyrinth der Einsamkeit*. Olten 1970. S. 47. Rüdiger のことばは次の書の裏表紙からの引用: Herbert Nette: *Hier kann ich doch nicht bleiben; Eine Sammlung letzter Worte*. München 1983. 初掲載は *Neue Zürcher Zeitung* vom 21. Oktober 1971. S. 35.

デスマスクの石膏模型

てきたままに、書きながら死んだことに深い感銘を表明した。しかしゲーテ自身がこうした完成の模範例に出会ったら、彼はむしろ不機嫌になる——ヴィーラント⁸の場合がそうであった。このことをクネーベル⁹宛にゲーテは1813年4月14日に書いている。「もうお聞き及びかもしませんが彼の最期のことばは、生きるべきか死ぬべきか、それが問題だ、であったそうです。これはしかし彼の懐疑主義を最後まで証明することになります」——これがゲーテのお気に召さなかったことは明らかである。たぶん非現実的であり、あまりにも様式化され過ぎているからであろう。というのは、1828年10月12日にもゲーテはカール・アウグスト大公の死についての公式「報告」に関連して、司法長官フォン・ミュラー¹⁰宛に、「このような最期の時というものは常に、デスマスクの石膏模型のように、生の（どんなに活動的な生であったにしても）苦悩にゆがんだカリカチュアなのです」と書いているからである。

私人としてのゲーテはそのようなものであるが、これに反し劇作家としてのゲーテは、最期のことばの万人周知の慣習（死における首尾一貫による生の完成）を実に巧く利用する術を心得ている。例えばファウストの死のことばは文字通りメフィストとの賭の文句に繋がるが、この文句はこれでファウストの生の署名となるものである。

そのような群衆をおれは見たい、
自由な土地に自由な民と共に立ちたいものだ。
その瞬間にならおれは言うであろう、
留まれ、おまえは実に美しい、と。 （第二部、五幕、11579-82）

ここでは接続法の「であろう“dürft”」に当然のことながら解釈者たちの出番が必要となるが、これよりもっと単純に、また劇全体をおおうサスペンス（「賭はどうなるのだろう」）も使うことなく、ゲーテは『ゲッ

ツ』では、シラーがよくやったようにこの万人周知の考え方を巧く用いて、主人公に「自由」と叫んで死なせている——これこそ全編を通してゲッツをプログラム通りに性格づけていることばであって、これ以外の台詞では話にならない、ましてやこれ以外の性格は考えられない。最期のことば、真のことばとしてのキーワードである。マリー・ボーマルシェが「クラヴィーゴ」と叫んで死に¹¹、ヴァーレンティーンが「市民的に」自己性格描写をして「立派に」死んでゆく¹²——これはわれわれが知る彼にすべて相応しい——のと比較できよう。夫の最期のことばを聞かされたときマルテが思わず口にした驚きの台詞「なんてことを！ 死にかけているのに嘘をつくなんて！」¹³では最期のことばの慣習が皮肉られている。しかしゲーテが最期のことばを生首尾一貫した完成のサインとして使う技巧はまだかなり単純であって、シラーがさりげない偶然の、一見平凡な最期のことばに巧妙に皮肉に二重の意味を籠めた使い方をしているのとは比べものにならない。しかもこの台詞をシラーは余人ならぬヴァレンシュタイン、「生の二重の意味」の識者であり打算家である將軍に言わせて退場させるのである¹⁴。

なぜ最期のことばに関心が寄せられるのか？ 死における不死。生の模範像の、ないし生という芸術品の完成。そしてそれに加えて第三の動機は最期の瞬間の「神秘」の魅惑である。これは教義で固められた宗教心とは別の次元で特に活発となる。というのもこの「神秘」は、K. R. アイスラー¹⁵だけでなく⁴⁾、シェイクスピアからトルストイまで多くの文学作家たちが説いてくれる「臨界体験」を証言するからである。それは存在と非存在が融合するパラドックスな瞬間であって、そこではあらゆる体験の彼方にあるものが体験され、ことばがことばにならないものをことばにする——それが最期のことばだ。「…生の中でこの上なく最も興味ある瞬間、実際、生あるものが生きるように思える唯一の瞬間」——とアリス・ジェ

4) K. R. Eissler : *Der sterbende Patient*. Stuttgart 1978.

ームズ¹⁶ は言う⁵⁾。これはいささか誇張に過ぎるものがあるようであるが、しかしいずれにせよ、それが人間^{コンディسیون・オブ・ユメス}の条件に当てる光のために最期のことばに以前から認められてきた価値の間接証拠にはなる。ゲーテもこうした魅惑の重要証人の一人である。『箴言と考察』の中で彼はフランス革命の主要犠牲者の一人について次のように述べている。「マダム・ロラン¹⁷ は断頭台で、自己の歩む最後の道すがらに浮かんだ特別の思いを記そうとして筆記具を求めた。彼女の願いが拒否されたのは残念なことだ。というのも生の終わりには覚悟のできた人間にはそれまで思いもよらなかったような考えが浮かぶものだからだ。それは過ぎ去った生の絶頂に輝かしく腰を据える浄福の魔神^{モーデン}のようなものだ。」(ハンプルク版 第12巻415頁)

「それまで思いもよらなかった」考え！ これと似たようなことは『白鯨』¹⁸ や『死を迎える大司教』¹⁹ その他さまざまな作品でも読むことができる。またイースター島の原住民は最期のことばのこうした啓示的な力を今日でもなお信じている（そしてそれをいち早く知るためにはサンチャゴからジェット機を飛ばせることも厭わないでいる⁶⁾）。南の海でもワイマルでも最期のことばに寄せる第三の理由は「神秘」なのである。

2

ところで、遅きに失した一つの異議がある。われわれの文化の慣例に従い、最期のことばに意味と重要性を持たせ、その実存的地位について熟考するというのであれば、何よりも先ず最期のことばととされている（伝記、アンソロジー、言い伝えなどで）ものが事実ほんとうにそうなのか、またその[すばらしい]形の通りが最後であったのか、つまるところ信憑性が

-
- 5) *The Death and Letters of Alice James.* hrsg. v. Ruth B. Yeazell. Berkeley 1981. S. 43.
 6) *Moby Dick.* Kap. 110; *Death Comes for the Archbishop.* New York 1927. S. 172; Grant McCall, *Rapunui: Tradition and Survival on Easter Island.* Sydney 1980. S. 118-119.

あると言えるのか、について確信を持ちたいものである。このような疑念は一般に抱かれていて、それなりに十分な理由があるからで、とりわけ同一人についていろいろな「最期の」ことばが存在することがよくあるから——標準的な最期のことばのアンソロジー²⁰ から判断すると、ラブレ²¹ が最期のことばの最多世界記録保持者で、次いでヴォルテールとヴィクトリア女王が、それにネルソン、ジョージ五世、デイドロー、ハイネらが続いている。

ゲーテの死は——その瞬間から画期的であった——一つの好例である。彼の最期のことばはどれほどよく保証されているのであろうか。これに関しては「文献」が山のようにあって、それらの厳めしい学識はそれ自体がパロディーと言えるほどである。新たな伝記作者カール・オットー・コンラディーが、「ゲーテは他にもまだいくつか奇妙なことをしゃべったと、知ったかぶりに話す人が少なくない」とさりげなく洩らしたのも不思議ではない⁷⁾。もうかなり以前、1907年にカール・シュデコップフ²² のゲーテの死についての書が出て以後の「研究」で分かったところでは、何百回となく繰り返された「も^{メー}っと光を！」伝説はすべて何も無し。生の総計としてまことに相応しい高潔で的確なこの二言の叫びは何も無し。1832年このかた行なわれてきた窓の鎧戸を開けてくれ（ワイマルの啓蒙）との願いの象徴的解釈も全部何も無し。いずれにせよ最期のことばはなかったのだ。あったのは彼の召使フリードリヒ・クラウゼに向けたことば「私のワインに砂糖を入れなかったらうね」（このことばから実存の総計を引き出すことはまずできない）。あるいは（^{ベグントリー} 術学）の大家シュデコップフに言わせれば）、息子の嫁オットーリエに向けた、「お手々」を頂戴、との要求があった。このことばに、特に H. S. チェンバレン²³ は象徴的で意味深長なものを見てとることができた（最後までのエロス、「永遠の愛の真髓」）のであった。ところがノー、ノーと、余人ならぬドルフ・シュテルンベルガー

7) Karl Otto Conrady: *Goethe. Leben und Werk*. Bd. 2. Königstein 1985. S. 569.

が1977年の全く学術的な労作の中で叫んでいる。傍証がない、つまり結局のところはただ一人オッティーリエ自身による証言だけである、彼女は舅の死の伝説を創設するために進んでお手々を差し出したのである、と。ところで話を「もっと光を！」に戻すと、これは召使のフリードリヒ・クラウゼに向けたことばだとされている。ところがクラウゼは彼なりに主人の死についてメモを遺して、1928年から出版されて知られている。この中ではお手々についても「光」についても全く触れるところがなく、老大家が「最後に頼んだのはそんなことではなくて、「おまる」だったとだけ記している⁸⁾。「もっと光を！」のほうが、ゲーテを賛美する後世の人びとにとって、殊にフランクフルト方言の「メーア・リーヒト」（寝心地がわるい）を想像するような意地悪²⁴にとっても、魅力に溢れているのは間違いない。

しかしこの百数十年来なぜこのような探索が行なわれてきたのであろうか？ ある一つの最期のことばの傍証なり真偽なりについての批判的な問いの背後にあるのは、結局のところすべての最期のことばの意義（「不朽性」に関してであれ「完成」もしくは「神秘」に関してであれ）についての疑念であり、結局のところ最期のことばの習慣ないし「制度」の正当性についての疑念である。労を惜しまなければ、有名な「最期のことば」の多くが本物ではなかったり、最期のものではなかったりすることがすぐわかるが、しかしまた、本物の多くも、ことば通りに「解釈」しても隠喩的に「解釈」しても、残念ながら無意味なものであることもわかるのである。

8) この項については Carl Schüddekopf: *Goethes Tod*. Leipzig 1907; その書の22頁に「ワインに砂糖」云々、また26頁に「お手々」の話がある。チェンバレンの引用は Chamberlain: *Goethe*. München 1912. S. 78. シュテルンベルガーの引用は Sternberger: *Schriften*. I. Frankfurt 1977. S. 44. クラウゼの引用は Krause: *Goethes Gespräche*. hrsg. v. W. Herwig. Bd. 3, 2. S. 889 (Artemis-Ausgabe). Karl S. Guthke: *Letzte Worte. Variationen über ein Thema der Kulturgeschichte des Westens*. München 1990. S. 88-94 の「もっと光を！」の真偽についての記述も参照。

引用に値するものであればあるほど信憑性は薄い。だから、マークトウェーンに言わせれば、むしろいっそのこと最期から二番目のことばを重んじよう、このほうが値打ちがある、ということになる⁹⁾。

しかしながら、「本物か偽物か」の問いに対する正しい答えは、そんなことは問題ではない、と言うしかないように思える。ゲーテが（あるいは他のだれであるにしろ）どのことばを「実際に」最後に口に出したかは、かなりどうでもよいことなのである。

最期のことばの制度はその信憑性と一体ではない。何故なら、最期のことばの信奉者、とりわけ文化史家たちが本来興味あるのは、必ずしも唯一死の床の経験的眞実ではなく、伝説であり、「俗^{フアップル} ^{コンヴェニエ} 説」^{インヘリテッド ミソロジー}「相 統 神 話」（これらはこのまま文化人の語彙に入っている）であるからだ。われわれの文化までもが尊重し伝承しているような最期のことばが、（死亡証明書のような）記録としての法的資格を持つ史実ではなく、人工の産物であるのは、稀れどころかしばしばあることである。そして、たとえそれらが非の打ちどころのない立証によって一般の疑惑をはねつけるものとなった場合でさえ、人工の産物として生き延びる。それらを最期のことばとして、記憶に値するものとして伝承する人びとの集団的幻想によって作り上げられ、経験上まちがいない正当性を認知され、信憑性を上回る魅力を持つオーラに包まれた人工の産物として生き続ける。したがって「本物」かどうかの問いはいささか現実離れしたものとなる。神話の信憑性を問うであろうか？ 神話は実際の史実の完全写本ではなく、独自の眞実、われわれが——良かれ悪しかれ（明らかに悪しくのほうがしばしばだが）われわれの生を律する眞実である。ここで了解されるような最期のことばは、多かれ少なかれ知性ある人間が自己自身に遺贈する人工の産物といういささか漠然とした大きな範疇に入るものである。例えば1932年にトーマス・マンが述べたゲーテもそうである。ゲーテがいまわの際に空中に書いた字らしい

9) Mark Twain: *The Curious Republic of Gondour*. New York 1919. S. 135–136.

もので「定着」させ、「保持」しようと努めたのは、「きわめて伝える価値のある（！）究極的な認識」であった、と¹⁰⁾。

いささか誇張した表現を取ってすれば（最期のことばのアンソロジーの歴史がこれを裏書きしてくれるであろう）、一人の人間が最期の吐息で言ったことを重大に受けとめるという何世紀にも及ぶ行為と、そうしたことばの伝承、世代から世代への順送りが表わすのは、まさに文化の真髄以外の何物でもない。これは文化の自己確認と自己証明の、つまりは文化の自己保存とその継続の保証のエLEMENTである。文化とは記憶を持つことであり、想起されるものは生き続けるのである。

3

こうした生命力の強いものの一つがつまり人間最期の時の発言である。それを証拠立てるのは、最期のことばの（多くのケースに見られる）「格言的」性格だけではない。最期のことばの活発な生命力は、伝記や言行録が生活・人物像の描写にそれらを——いわば画竜点睛として——利用する手法にも表われていて、成程と思わせる。ゲーテがその好例である。

まず目立つのは、どの伝記も「お^{ポト シャンブル}まる」の話に触れるのをはばかっていることである。こうした沈黙はまたそれなりに、宮廷説教師にして総監督であるヨーハン・フリードリヒ・レール²⁵⁾が埋葬式の弔辞の中で、疾くから神話次元に昇格していた故人が最期に意味深いことばを洩らさなかったと述べて表わした遺憾の気持ちの反映でもある¹¹⁾。末期のことばの多かれ少なかれ一般に馴染みあるほうの文句に、前後の事情からしてそれが必要である場合ですら、一切言及しないですましているゲーテ書が稀でないのもこれらと合致する。あれこれのことば、あるいは一つ以上のことば（とりわけ「もっと光を！」とオッティーリエの「お手々」）を最後の日々

10) Thomas Mann : *Adel des Geistes*. Stockholm 1955. S. 127.

11) Ludwig Geiger : *Goethes Leben und Werke*. Leipzig 1904. S. 56 による。

と時間の話の中にさりげなく混ぜる類のゲーテ書も、根本的にはこれらと歩調を同じくしている——義務として完全を期すことに努めてはいるが、しかしコメントは一切付けない。ギュンター・ミュラー、エーミール・ルートヴィヒ、カール・ゲーデケ、ジャン・マリ・カレらは、実証主義的な即物性好みからにせよ、暗々俚に皮肉を籠めた距離を置いてのことにせよ、こうした伝記上の禁欲の実践者である¹²⁾。そうしたコメント控えも、例えばエトヴィーン・レーツロープのようにゲーテの死についての記述を、「偉大な生命が消えた。人類の一つの時代が終わった」¹³⁾と悲壮な調子の大仰な文句で締め括るのを見ると、反発さえ覚えてくる。ゲーテの最期のことばに直面しての解釈モラトリアムよりも一般的なのは解読の楽しみであるのは間違いない。想像力の確かさを示す独特の好例がリヒャルト・フリーデンタルのゲーテ伝である。トーマス・マンと同様フリーデンタルが魅せられたのは、口から出たさまざまな最期のことばの象徴性ではなく、もはや口が利けなくなった人がして見せた字を書く身ぶりである。「書きながらこの偉大な作家は死んだ。周囲にいた人々が目撃したと言っているところによれば、彼は正確に句読点まで打った。彼は最後に大きい文字を、Wを描いた。われわれはこれを彼自身の名前ヴォルフガング (Wolfgang) の頭文字とも、あるいはまた彼の最後の偉大な世界文学 (Weltliteratur) の思想の意味にも、また世界 (Welt) としての人類の相互理解とも読み取ることができる。」¹⁴⁾

-
- 12) Günther Müller : *Kleine Goethebiographie*. Bonn 1947. S. 302 ; Emil Ludwig : *Goethe*. II. Berlin 1926. S. 650 ; Karl Goedeke : *Goethes Leben und Schriften*. Stuttgart 1874. S. 553 ; Jean-Marie Carré : *La Vie de Goethe*. Paris 1927. S. 288 ; J. W. Schaefer : *Goethe's Leben*. II. Leipzig 1877. S. 393 ; Oscar Browning : *Goethe. His Life and Writings*. London 1892. S. 136 ; S. M. Prem : *Goethe*. Leipzig 1899. S. 318-319 ; P. Hume Brown : *Life of Goethe*. II. London 1920. S. 783 ; Edmond Jaloux : *Goethe*. Paris 1949. S. 315 ; Christoph Wetzell und Gerhard Wiese : *Goethe und seine Zeit*. Salzburg 1982. S. 416.
- 13) Edwin Redslob : *Goethes Leben*. Berlin 1932. S. 136.
- 14) Richard Friedenthal : *Goethe. Sein Leben und seine Zeit*. München 1963. S. 734.

ゲーテの最後のことばを伴う身ぶりについての報告、とりわけもっと光が入るように窓の錠戸、それも「二番目の」を開けてくれ²⁶との願いは、それ以上に強く後世の象徴化しようとする見方を促した。以前の伝記の記述は、この短くした「もっと光を」を象徴的だと喜んで尊重した¹⁵⁾。今日の伝記記述は努めて批判的な距離を置こうとしている。それは、ヴォルフガング・ヒルデスマイマー²⁷が洩らした「崇拜する後世のためにも〔天才の死は〕最小限度の格調高い美、伝承に値するもの、“最後のことば”，“最後のジェスチャー”を果たすべきだ¹⁶⁾との嘆息がよくよくこたえたい。その臨床的冷静の模範例としてコンラディーの記念碑的叙述をここでもう一度見てみよう。

「彼は肘掛椅子に座ってうつらうつら仮眠していた。少なからぬ関係者の主張するところによると、彼はなおいくつか奇妙な片言を口にし、日付を尋ね、“じゃ春が始まったのだ、私たちはそれならいっそう早く回復できる”と言い、部屋に光が入るように窓の錠戸を開けさせた。おそらく彼は最後の時間にはことばが全く言えなくなったようだ。しかし彼は死の不安は全く持たなかった。人差し指で彼は宙に記号を描いたが、手の力が抜けてくると、膝にかけた毛布の上に描いた。“死の予感には彼は全くなかった”と、フォン・ミュラー司法長官は報告している。“彼は医者が見放した9時頃には、もうすっかり体力が失せていながら、まだオツティーリエをからかっていた。彼の死はただ呼吸が止ま

-
- 15) J. G. Robertson: 「以前の伝記作者たちは、老詩人ゲーテの最期のことばは“もっと光を!”であったとの言い伝えについて延々と論ずることを好んだ」(*Goethe*. London 1927. S. 213)。だがこうした伝記作者たちがそれについて延々と論じなかったとしても、彼らは「もっと光を!」を臨終のシーンの最後に置いて印象づける報告体の簡潔性によって同種の効果を挙げ得たのであった。例えば Robert Prutz: *Goethe*. Leipzig 1856. S. 94 や、A. Hayward: *Goethe*. London 1902. S. 222。
- 16) Wolfgang Hildesheimer: *Mozart*. Frankfurt 1977. S. 370。

ただだけで、痙攣も苦闘もなかった” …それは1832年3月22日木曜日の11時半のことであった。」

たいへん控え目であるとはいえ、これはやはり最期のことばの「重み付け」の伝統、特にゲーテの「もっと光を」の伝統に対する反駁である。それに最期の吐息のことばの重大視、あまりな重大視は、1927年にロバートソンがそう呼んだ「以前の」伝記記述の終焉と共に必ずしも廃れ果てたわけではなかった。当時の優れた英国のゲルマニストであるロバートソンは、このことばはワイマルの啓蒙とは関係なく、フラウエンプラーン²⁸の邸内の暗がりに関係することであると指摘して、悲壮な「もっと光を」熱を醒まさせた。しかし、とロバートソンは続けて、「しかし“もっと光を！”」の象徴的応用は変わらない。一生を通じてゲーテは、たゆまず世界の謎に「もっと光を」捜し求めた。そして彼は、彼のファウストのように、渴望を癒されぬままに死んで、謎は解決されない¹⁷⁾。更に1932年のインゼル年鑑(*Insel-Almanach auf das Jahr 1932*)にも余人ならぬマックス・ヘッカーが次のように書いている。

「もう早くからゲーテの最期のことば「もっと光を！」(これが事実最後であったことはクドレー²⁹がゲーテの死の直後にしたためた手記の中で、また司法長官フォン・ミュラーも証言している)をこの詩人の全生涯の意義深いシンボルとして解釈し始めた。こうした神化は当然であって、あながち根拠のないことではない。なぜなら、早春の朝の薄い陽光も聖なる日輪から出たものであって、それ自体太陽のように輝いていたゲーテの眼は、屈折した光であってもこれを迎えようとしたのである。この光も永遠の神なる自然の作用であり、ゲーテの神性は今しもその懐に帰ろうとしているのであった」。 (207-208頁)

17) J. G. Robertson : *Goethe*. London 1927. S. 213.

これをフランス語では同じ年に著名なロマン・ロランの名で飾り立てた豪華な記念版で読むことができた¹⁸⁾。

もっと光を——象徴的解釈は単純でやさしいように思える。しかし興味深いのは、開かれる窓の鎧戸が伝記作者にとって実に種々さまざまな比喩的意味を秘めていた、しかもそれが各解釈者にとっては自明の理であった、ということである。ロバートソンとヘッカーは、光を求める人ゲーテ、と言った。英国で最初のすぐれたゲーテの伝記を書いた G. H. ルーイスも同じようなことを述べている。「終焉の暗闇がにわかを訪れた。絶えずより多くの光を憧れ続けてきた彼は、死の影に覆い包まれながら別れにこれを求めて叫んだのである。」もう既にこの時——1855年に——窓の鎧戸は全然もう話題にされず、ただ「聞き取れた最期のことばはもっと光を！であった」となるまでに神話形成が進んでいたのである¹⁹⁾。ロバートソンと同様伝承されたことばを「非歴史的に意味深い」とするゲオルク・ヴィトコフスキーはしかし、求める人ではなく「人類に偉大な光をもたらす人」を念頭に置いている²⁰⁾。この二つの解釈の方向をパウル・フィッシャーは『ゲーテの最後の年』で一つに合わせまとめる。それも、1832年このかたゲーテの最期のことばに寄せた礼賛をひとまずきっぱり斥けるという、変わった手法を使ってである。ゲーテは、問題の3月22日、緑色の肘掛け椅子に座ったまま事切れたとき、引用に値するような重要なことばは何一つ口にしなかったのだ、と。

「彼の最期のことばについてはじっさいほとんど疑いの生じる余地はない。イエニー・フォン・パッペンハイム³⁰⁾が語る、彼ははっきりこう言った、“いよいよより高い変化への変化がやってきた”という話は、

18) Rolland (Hrsg.): *Goethe*. Paris 1932. S. 84.

19) G. H. Lewes: *The Life and Works of Goethe*. II. London 1855. S. 450.

20) Georg Witkowski: *Goethe*. Leipzig 1899. S. 264.

他の誰からも証言が得られていない。これに引き換え、大方の一致が見られるのは、ゲーテが最後になお一つの願いを言ったということであり、その願いというのが、彼の最期のことばはもっと光をであったという美しい伝説を作るきっかけとなったものである。彼が実際に言ったことはクドレーの記録に述べられているが、それによると、ゲーテは確かに“もっと光を”望んだのだが、しかしそれは独り歩きをした“もっと光を”が解釈されているような比喩的な精神的な意味においてではなく、彼は確かに二重の意味で光の友であったが、全く単純素朴に、暗くなっている部屋にもっと陽光を欲しがったのである。

確かにゲーテの最後の時間を違ったふうに想像したいと思ったり、死にゆく偉人にはまだその他いろいろな美しい、気高い、また敬虔なことばを言ってほしいと願う人は少なくない。まさにそうした願望から「もっと光を！」伝説は生まれたのである。ゲーテはそのような感情的な崇拜者や批判的な観察者にとって、いわゆる「美しい」死を遂げてはくれなかったのである。彼の心中に去来したことは誰一人知らないし、それを判定できる人はいない。彼の生涯最後の日々と時間に外から見たり聞いたりできたことは、彼が人間として全く素朴に、人間的自然的に生きたように、全く素朴、全く人間的自然的である。そしてこの素朴さ、この飾り気なさなればこそ彼は、もし彼が自らを、自らの人格と自らの生涯を、何らかの美辞麗句で飾り立てたとするよりも、はるかに偉大にわれわれには見えるのである。]²¹⁾

光を求める人であり光をもたらず人ゲーテ、太陽の子であり啓蒙主義者であるゲーテとの伝承への疑念を表明した途端に、少なからぬ人が否応なく陥る態度の豹変ぶりは、それだけにますます意外である。

21) Paul Fischer: *Goethes letztes Lebensjahr*. Weimar 1931. S. 163–164.

「ところで話をゲーテの“もっと光を”に戻そう。彼はこのことばを実際に全く素朴に日常的な意味で話したとすれば、それははるかに高い意味での真実なのである。ゲーテの全生涯は、自己の内心におけるより多くの光とより多くの耿耿としたエネルギーを求めての偉大な戦い、彼を取り巻く、また彼の方へやってくる人類を照らすより明るい、より暖かい光と愛と生命の光線を求めての偉大な戦いであり、彼は類稀なほど力を尽くし誠実にこの戦いを遂行し、類稀な成果を収めた。」²²⁾

伝記の全歴史を見渡しても、「生きてきたままに死ぬ」という遍在思考形式のこれにまさる好例は存在しないであろう。

アルバート・シュヴァイツァーはこれに反し、1932年のゲーテ記念の年における講演で、この最期のことばを故人が「永遠の光の国へ入った」ことを象徴的に示唆するものとして捉えたが²³⁾、一方ユーリウス・バプは、そこに再度自然的なものへのゲーテ的親近、「自然力」、特に「彼の最愛の感覚の自然力」への親近を見ようとした²⁴⁾。またジャン・パリスは、この最期のことばに意味と重味を加えるに当たり、「彼は3月22日その全生涯のレジュメを思わせるようなことば“もっと光を！”を唱えて死んだ」と、やや慎重な姿勢を示している²⁵⁾。これに対してとてもユニークなのはヘンリー・W. ネヴィンソンの『人間にして詩人ゲーテ』の解釈である。友人であったシラーの「最後の願い」ももっと光を入れてほしい窓に向けられたものであった²⁶⁾（「両友は死においても互いに似ていた」）——シラーの場合は——ゲーテの場合もそうであるが——絶対的に最期のことばではなかったにしても、この確証に乏しい類似に、ゲーテ・シラー記念碑のため

22) a. a. O. S. 165.

23) Albert Schweitzer : *Goethe*. München 1932. S. 3.

24) Julius Bab : *Das Leben Goethes*. Stuttgart 1921. S. 114.

25) Jean Paris : *Johann Wolfgang Goethe*. Paris 1956. S. 7.

26) Henry W. Nevinson : *Goethe. Man and Poet*. New York 1932. S. 244.

の格好の銘文であると思いたいところである³¹。しかし次のことを付言しておかねばならない。両古典主義作家はその最後の吐息においても互いに似通っていなければならないということであるならば、少なくともある報告によると、シラーも文字を書くように手を動かしながらみまかったという話を思い起こすほうがいっそう適切であろう (*Schillers Werke. Nationalausgabe. Bd. 42. S. 435*)。だが、死の点においてまでも兄弟関係を確認しようとするのはもちろん怪しげな試みである … 臨終の床の「もっと光を！」をゲーテが「フリーメーソン会員」として死んだ証拠ととる大それた考え²⁷⁾と同じくらい怪しげと言える。

どうやら全く何でもなかったらしい死にゆく者の発言の解釈と意味付与が、このように広く広がり、かつまたさまざまな方向に走ると、論争の種を蒔き疑念を呼び起こすことになるのも一向に不思議ではない。しかし高尚で象徴的な解釈が以前のゲーテ伝記だけの仕事ではなかったように、逆に批判ものちの現象として始まったわけではなかった。既に1886年アレクサンダー・バウムガルトナーの『ゲーテ その生涯と作品』の第3巻には次の記述が見られる。「あの有名なことば“もっと光を”は、結局のところゲーテの侍医ドクター・フォーゲルも保証していないので、そろそろこのへんでもう止めにしたらよかろう。その最後の時間にゲーテは——イエズス会士のバウムガルトナーはこの“老異教徒”についてこれだけはわかっているとして——言い伝えられていることばを、“それに付与されているような尊大な意味をこめて話せる”ほどの“状態にはもはやなかった”。むしろ“恐ろしい死との戦いが彼の全力を打ち砕いていた。半ば昏睡の裡にかつてはあれほど明るく誇らしげであった精神の光がしだいに消えていった。この最後の時間に彼の心中に起こったことは誰にもわからない」²⁸⁾。

27) この解釈については Gerhard Hildebrand: *Goethe, der Mensch*. München 1932. を参照。

28) Alexander Baumgartner: *Goethe. Sein Leben und seine Werke*. Freiburg i. Br. 1886. S. 335–336.

これにはいささか聖職者風の凱歌のような響きがある。結局のところ伝記作者は、あの偉人が、義務とされている“わが^{イン マヌストゥーアス コメンド スピーリトゥム メウム}靈魂を汝のみ手に委ねる”を唱えてあの世へ行ったことを伝えることはできないではないか、と。17世紀以来敬虔文学ではお馴染みの「浄福の死と不幸な死」を対比させる勇ましい情熱がここになお活きているのが感じられる。これに比べ例えば1912年のジョウジフ・マケイブの疑念はもっと冷静で余計な興味を控えている。「その直ぐ後彼は召使に言った、“二番目のシャッターも開けてくれ、もっと光が入るように”と。“もっと光を”の叫びが、これを象徴的なものにしたと願う人々によって取られたのはこのセンテンスからである。彼の医師はこれが彼の最後のことばであると言っているが、他の人々は彼がそのあとオットーリエの手を求めたと言っている」²⁹⁾。何十年もの間市民的なゲーテ像の紹介者の役割を果たしたアルバート・ビルショフスキーでさえ、1904年批判的中立の立場を取ろうと努めて次のように言う。「はっきりとは」この最期のことばは確認できない、「もっと光を！」は象徴的な意味で言われたものではなかった、宙に書かれた文字は W を除き読めなかった、ゲーテはもっと多くの光だけでなくオットーリエの「お手々」もねだった「そうである」、と³⁰⁾。

息子の嫁のお手々ねだりはゲーテの最後の時間の物語で2番目に好まれる逸話である。ヒルデブラントはフリーメーソンの「もっと光を！」説に刃向かうためにオットーリエ側につく³¹⁾。同じようにルートヴィヒ・ガイガーも、また英国では H. G. アトキンズがそれぞれの伝記の中で光の「偉大なフレーズ」から「おいで、かわいい娘よ、お手々をちょうだい」と争う。これらはしかし神秘のヴェール剥がしとか、すっぱ抜きの意味でしているのではない。反対にこれら（及びその他の）伝記作者たちにとっ

29) Joseph McCabe : *Goethe. The Man and his Character*. London 1912. S. 372-373.

30) Albert Bielschowsky : *Goethe*. II. München 1904. S. 677.

31) 原注 27) 参照。

てお手々の物語はただその象徴的意味深さのためにこそ貴重なのである。
H. S. チェンバレンのことは先に述べたが——この感動的な終局面で彼が思い当たったのは崇高な「永遠の愛の真髓」に他ならない（原注8）を参照）。ガイガーの場合はそれほど悲壯的には聞こえない。「…忠実な看護に対する愛情をこめた感謝、彼の愛情の優しい表現」³²⁾。アトキンズも同様である。光の説の「メロドラマティックな感傷」ではなく、今は「素朴な人間的な愛情」のことはのほうが、彼にはガイガーと同じく断然好ましく意味深い³³⁾。1966年、この懐疑の時代にまだ、ヘルバート・ギンターは極めて強い調子で、彼のゲーテ伝記を『最後のことば』と表題を付けた章で絶頂に上らせる。そこでは「もっと光を！」が同じく「人間性」のために、ひいてはオットーリエ説が適切であるために、わきへ除けられているのである。

「彼の大きな暖かい眼の最後のまなざしまで、家族の中で彼の心にはいばん親しかった女性、つまり息子の嫁オットーリエが彼の傍にいたこと、また彼女に向けた彼の最後のことばが軽いユーモアの響きに満ちていたことを思い浮かべるほうがいっそう人間的である … 彼はとても上機嫌であつたらしい。だから最後の時間のくる前に彼女に向かってこう言ったのだ。“さあ、かわいい女房殿、あんたのお手々をちょうだい”と」³⁴⁾。

4

われわれのキー・ワードは西欧文化における最期のことばの「バイタリティー」であった。19世紀と20世紀のゲーテの伝記をちょっと概観したと

32) Ludwig Geiger: *Goethe*. Berlin 1910. S. 488.

33) H. G. Atkins: *Johann Wolfgang Goethe*. London 1905. S. 167–168. 原注 24) の Bab の書 S. 114 も参照。

34) Herbert Günther: *Johann Wolfgang Goethe*. Mühlacker 1966. S. 227–228.

ころ、そのような存在証明の生命と伝承の状況がゲーテの事例で明らかになった。最期のことばがほんものかどうかの疑問に対する答え以上に重要なことは、そのことばが活きているという事実、そのことばが伝承されて文学、伝記、メディアで引用され、今日でもわれわれの日常神話の形成に力を添えているという事実である。「私は祖国のために失う生命が一つ以上あればと願う」³²「果たせしこと少なく、為すべきこと多し」³³「苦痛を通じてわれわれは神に到る」³⁴「哲学への一步は懐疑である」³⁵「もっと光を！」等々。歴史学者は次のようなことを問題にする。どれが伝承されどれが伝承されないか（ゲーテの場合のように一つ以上の最期のことばがあって選択できるとき）？ どのような形で（例えば「窓の鎧戸を開けてくれ…」ではなく簡潔な形に直した「もっと光を！」のように明らかにほんとうでない形で）？ どの時代にはどんなタイプの最期のことばか？ われわれはひょっとして世俗化の一つの現象形式と取り組んでいるのではないだろうか、つまり制度化された宗教がその機能を発揮できなくなったとき最期のことばが指針としての役割を果たしているのでは？ 人々がおしなべて「わが靈魂を汝のみ手に委ねる」と唱えて死のうとした中性後期このかたそうした世俗化された導きのことばの「真実」は、非同時性の同時性にもかかわらず、変化してきたのでは？——連禱の文句に逆らって突然に、つまりキャベツを植えているときに死にたいと願ったモンテニューのような人物もいる³⁵⁾。ある社会、ある文化に合った期待は変わるものであろうか？ だとすると最期のことばは一つの時代、一つの環境のプロフィールを密かに表わしているのではないだろうか？

答えは最期のことばに寄せる興味の歴史に現われる。例えば最期のことばのアンソロジーの需要が近代の始まりの直後から生じたのは偶然ではないし、それは今日まで続いている。そのことから歴史学者はさまざまなものを引き出すことができる——とりわけ、最期のことばは何世紀もの間重

35) Montaigne : *Essais*. Buch I. Kap. 20.

要視されてきた、それを最期の瞬間まで延ばしてそれまでは聞くことができな
ないのはまことに残念だと思うほど重要視されてきたということ。

訳者注

- 1 ファウスト 第二部 11583-11584行
己の此世に残す痕は
劫を経て滅びはすまい。(森 林太郎訳 岩波文庫)
- 2 Publius Aelius Hadriānus. 76-138. ローマ皇帝。在位：117-138.
- 3 Francisco Franco. 本名 Francisco Paulino Hermenegildo Teódulo F.-Bahamonde. 1892-1975. スペインの軍人で、独裁政治家。1947年終身大統領となる。
- 4 William Butler Yeats. 1865-1939. アイルランドの詩人・劇作家。1923年ノーベル文学賞受賞。A *Vision* は1966年ニューヨークで出版。
- 5 Alexander Pope. 1688-1744. 英国の詩人。Epistle to Lord Cobham は1733年の作。
- 6 Edward Young. 1683-1765. 英国の牧師で詩人。
- 7 Octavio Paz. 1914 生まれのメキシコの詩人。
- 8 Christoph Martin Wieland. 1733-1813. 啓蒙主義時代のドイツの詩人。ワイマル宮廷の教育係を務めたことがあり、ゲーテと親交があった。
- 9 Karl Ludwig von Knebel. 1744-1834. ゲーテの友人でプロイセンの軍人・著述家。
- 10 Friedrich von Müller. 1779-1849. 晩年のゲーテと親しく、ゲーテの遺言執行人となる。
- 11 悲劇『クラヴィーゴ』(1774) 第4幕で、クラヴィーゴに裏切られたポーマルシュの妹マリーが死ぬ。
- 12 『ファウスト』第一部の登場人物。グレートヘンの兄で、妹を誘惑したファウストと決闘して死ぬ。
- 13 『ファウスト』第一部 2961行。
- 14 『ヴァレンシュタイン』第5幕で、ヴァレンシュタイン将軍が夜遅く寝室に引き上げる際、友人ゴールドドンに、「お休み、ゴールドドン！ わしは長い眠りにつこうと思う。このところ悩みが大きかったからな。あまり早く起ささないようにしてくれ」と言う。結果からみれば、これがその夜暗殺された将軍の最後のことばとなる。
- 15 Kurt Robert Eissler. 1908 年生まれのスイスの精神科医。

デスマスクの石膏模型

- 16 Alice James. 1848–1892. アメリカの心理学者。小説家のヘンリー・ジェームズの妹。
- 17 Jeanne Manon. 1754–1793. Roland de la Platière の妻で、マダム・ロランは通称。ジロンド党首脳の一として処刑された。
- 18 *Moby Dick*. アメリカの小説家メルヴィル (Herman Melville. 1819–1891) の海洋小説。
- 19 *Death Comes for the Archbishop*. アメリカの女流作家ウィラ・キャザー Willa Sibert Cather. 1873–1947) の小説。
- 20 Edward Le Comte : *Dictionary of Last Words*. New York 1955 のことのようにである。
- 21 François Rabelais. 1494?–1553. フランスの医師で作家。
- 22 Karl Schüddekopf. 1861–1917. ワイマルの Goethe-Schiller-Archiv の所員で、ゲーテ研究者。 *Goethes Tod. Dokumente und Berichte der Zeitgenossen*. (1907) を著わして、ゲーテの最期のことばが「もっと光を！」であることに疑問を述べた一人。
- 23 Houston Stewart Chamberlain. 1855–1927. 英国生まれのドイツの哲学者。 *Goethe* (1921) を著わした。
- 24 Werner Betz : *Humor in Goethes Landschaft und Goethes letzte Worte*. in : *Sprache und Bekenntnis. Hermann Kunisch zum 70. Geburtstag*. Berlin 1971. S. 101–112 を参照。
- 25 ゲーテの埋葬式は、死亡の4日後の1832年3月26日午後5時から行なわれ、Johann Friedrich Röhr 博士が葬儀委員長を務めた。
- 26 ゲーテの死後まもなく出版された *Goethe's letzte literarische Thätigkeit, Verhältniß zum Ausland und Scheiden usw.* (1832) によれば、「“Macht doch den zweiten Fensterladen in der Stube auch auf, damit mehr Licht hereinkomme.” がゲーテの最期のことばであったと言われている」と書かれている (下線は訳者)。著者の Karl Wilhelm Müller はワイマルのギュムナジウムの教師で、多くの関係者の話をまとめたものと思われる。また、当時のイェーナの新聞 *Jenaische Allgemeine Literatur-Zeitung, Intelligenzblatt* 38 vom Juni 1832 にも「彼は書斎の窓のシャッターが一つしか開いていないのに気付いたので、召使に言った、“もっと光が入るように部屋の窓のシャッターをもう一つ開けてくれ!” と。これが彼の最期のことばだった、と言われている」と書かれている (原注 8) Schüddekopf の書の22頁参照)。
- 27 Wolfgang Hildesheimer. 1916–1991. ドイツの作家。

- 28 Am Frauenplan. ワイマルのゲーテ邸のある場所。
- 29 Clemens Wenzeslaus Coudray. 1775–1845. ワイマル公国の土木局長。ゲーテの最期を見守り、記録 *Goethe's drei letzte Lebensstage*. (1889) を残した。
- 30 Jenny von Pappenheim. 1811–1890. ナポレオンの末弟ジェロームが女官との間に設けた庶子で晩年のゲーテの取り巻きの一人。彼女の主張するゲーテの最期のことは、*“Nun kommt die Wandlung zu höheren Wandlungen.”* である。
- 31 シラーの最期のことばについては、Karl Guthke: *»Richter« oder »Leuchtöl«? Schillers letzte Worte in der Biographie. in: Jahrbuch des Freien Deutschen Hochstifts 1992. Herausgegeben von Christoph Peres. Max Niemeyer Verlag Tübingen. S. 183–204* (邦訳:「審判者」か「ランプの油」か?——伝記の中のシラーの最期のことば——成城大学『経済研究』第137, 138号所載)、及び同著者の *Letzte Worte*. (原注 8) München 1990 の第1章第4節 (邦訳:ゲーテ時代のドイツ演劇の中の最期のことば 成城大学『経済研究』第132号所載) を参照。
- 32 アメリカ独立戦争の英雄ネーサン・ヘイル (Nathan Hale. 1755–1776) が英軍の捕虜となり、絞首台の下に立ったときのことは。
- 33 英国の政治家セシル・ローズ (Cecil John Rhodes. 1853–1902) の最期のことは。
- 34 ドイツの劇作家ビュヒナー (Georg Büchner. 1813–1837) の最期のことは。
- 35 フランスの思想家デイドロ (Denis Diderot. 1713–1784) の最期のことは。

あ と が き

本稿は Karl S. Guthke の *»Gipsabgüsse von Leichenmasken«? Goethe und der Kult des letzten Worts. in: Jahrbuch der Deutschen Schiller-Gesellschaft 35 (1991) 73–95* の後半 III–VI (81–95) の翻訳である。前半 I–II (73–81) は、同著者による *Letzte Worte. Variationen über ein Thema der Kulturgeschichte des Westens. München 1990*. (信岡訳:『往生際の名台詞』三省堂 1995) にほぼ収められているので、これを省略して、ゲーテの最期のことばについて論じた部分のみを訳してここに掲げた。